



焼畑の知的熟練

お盆前、新潟県の旧山北町（村上市山北地区）の方をお願いして、焼畑を体験しました。生業の里で体験して以来10年ぶりです。

前回の体験は、惨めなものでした。連日、35度を超える猛暑が続き、大阪は38度。山北も雲一つない快晴。そんななかでの山仕事。杉の枯枝を広げて並べる作業を、昼間に行います。この作業を1時間ほどやっただけで、

リタイアしました。驚くほどの汗が出て、4リットルの水を消費しました。夜になって山焼きを見学し、翌朝、赤カブの種まき。1泊2日の行程で働いたのは1時間10分。非戦力の見物者で終わりました。

それ以来、「焼畑だけは二度とやらない」と公言していました。ところが「二度とやれない年齢」に近づくと、「もう一度」という気持ちちょっぴり。「仲間に紹介したい」という気持ちも湧いてきました。そこで、「最後の焼畑ツアー」を呼びかけたワケです。

焼畑は比較的小規模なものでした。地元の方6人と、我々9人での作業です。前年に杉を切り出した山で、切り落とした枝を乾かします。均等に乾かすため、枝を裏返したり、立てて通気をよくしたり、準備には半年以上の時間が必要です。焼畑の直前に、枯れ枝を地面に均等に広げます。それが昼間の作業。夕方には山の神様に安全祈願し、最も高い場所に火をつけます。その後、等高線に沿って



▲高く舞い上がる焼畑の炎

順に山裾に向けて火を広げます。炎は高さ3～4メートル程度になります。全部を焼き終わるのに、2時間近くかかりました（大規模なものだと翌朝までかかることもあるそうです）。翌朝、まだ、畑土が熱い間に種をまきます。その後は間引や草取りをして、4カ月で収穫です。

焼畑では「火を余す（山火事を出す）」ことは御法度。炎に巻き上げられた火が飛び散らないよう、防火帯をつくり、消火ポンプも準備します。また、死角をつくらないよう各人が火を監視します。誰の指図がなくても、全体を見ることができるよう、誰かが移動をしています。火をつける人が監視にまわったり、スイカを切りながら監視をしていたり、融通無碍です。目の前の作業と焼畑全体の安全の確保に向けて、同時並行に注意力を発揮します。多能・並行処理。焼畑の知的熟練を見せていただいた気分です。

（MBO 実践支援センター代表）